

水びたしの聖書



Grasshouse

閉じられる画廊

夏の終わり――。

黄色っぽい、ねばりつくような陽射しの午後だった。

路上の空気が、熱気でゆらゆらとゆがんでいた。

蒸すように澀んだ空気の中を、列をなした車が強烈な日光を浴びながら、ゆっくりと徐行する

。

目を細めながら空を見上げると、水気を失って弱々しくなった柳の枝が、熱風にけだるく揺れている。

ちりちりと縮れた柳の葉の向こうから、金色の直射陽光が烈しく照りつけていた。

私たちは、銀座の並木通りから少し過ぎ、京橋に近いビルの路地裏に入った。

この辺りから、ビルの作りが急に古めかしくなってくる。

私は男の痩せた背中を見ながら、これから何が始まるのか嫌な不安を感じていた。

人間はねえ、他人を食い物にしているときに、いちばん生き生きしているんだ。生き血を啜っているときにね――と男はにやにやと笑った――それだからこそ、この世は面白い。私の扱っている商材は、人間に関するあらゆるものです。それこそ天国の扉から地獄の釜まで売ってますよ。少し私と、憂さ晴らしをしてみませんか。次回は名刺をたくさん用意しておいてください。

先日、新橋に程近いコリドー街の古いバーのカウンターで飲んでいると、隣り合わせに座ったこの男から、奇妙な誘いを受けた。

実直な勤め人には見えなかった。

丸いサングラスをつけて尖った顎を突き出し、襟の詰まった青鼠色のシャツを着て、まるでマッサージ師、整体師のような風態の人物だった。

年齢は四十代だろうか。

「気配が弱いすな、あなた」尋ねかけてもいないのに、男はいう。「ははあん、どうやらいま、失意の中にありますね。ずいぶん、肩の力が衰えている」低く囁くような声で語りかけてきた。嫌なことをいう、と思った。

いわれなくてもわかっていた。

私はよほど鬱病患者のような冴えない顔つきをしてしていたのだろう。

按摩のようにも見えた男は、話し込んでいくうちに業界紙関係のマスコミ崩れのように思われた。しかし大新聞やきちんとした出版社の人間には見えない。

色は白く、顎が尖り、爬虫類じみた薄い唇をしていた。ただ奇妙に品のいい、柔らかく冷たい声をしていた。

「どん底ですよ」私はいかにも迷惑そうな自嘲的な苦笑いをして見せた。「もうこの人生、失意も有頂天も、ありません」

「投げやりですな随分。いや、失礼しました。整体を多少やっていたもんでね。人間の持つ勢いというものを、見てしまうんですよ。背中に、出るんだなこれが」

男は、薄い手のひらを馴れ馴れしく私のシャツの背中に当てて、顎をしゃくり、にやりとしながら、何かを感じ取るようなふりをした。

「死相でも出てますかね」と私は苦笑して不安をごまかすために、グラスをあおった。

しがない画廊経営者の私は、この不況のあおりを受けて、親父が半生をかけて作り上げた画廊を、年内にも閉じることになっていた。

スケジュールもすでにあと数人の画家の個展が入っているのみであった。

最後の搬出の日に、内輪でささやかなパーティーを開くことになっていた。その日、私は絵の掛けられていないだっ広い白い壁に囲まれて、回想にふけりながらゆっくりと缶ビールを飲み干すことだろう。

『葛木画廊』――。

銀座から京橋にかけてよく見られるような古いビルのワンフロアを埋めた小さなギャラリーだが、かつて無名の美大生を発掘して、『美術手帖』や『芸術新潮』に取り上げられ、そこそこの絵描きやイラストレーター、オブジェ作家に育てた過去の実績もある。それはいわば私の青春だった。

芸術や前衛という言葉がまだ輝いていた、いい時代だった。

一時期、街ではアングラ系のアーティストたちがパフォーマンスを行い、健全な市民たちがそんな幼稚な変わり者たちの遊びに素直に驚いてくれた。一方では火炎瓶や放水の鳴り物入りのきな臭い政治の時代ではあったものの、電車に乗っているサラリーマンたちの顔つきも、殺伐とした現在よりももっと穏やかで、人の良い笑顔が多かった。

私たちはことあるごとに夜の新宿の街に繰り出した。

金のない画家、自称詩人、前衛舞踏家。その中には、現在も雑誌で取材されているような著名人もいる。私には何の才能も表現力もなかったが、彼らの保護者のように振舞うことで、幾分かのパライドを満たし、何かしら文化や芸術にふれているような気分になることができた。

私はつまり、幸運だったのだ。

もともとビルのオーナーが、親父の知り合いだった。親の作ってくれた人脈も、有利に働いた。真夏、渋谷の松涛あたりの蟬の啼きしきる鬱蒼とした豪邸に、リトグラフや油絵を小脇に抱えて行ったこともある。

その後の十年は、面白いほど儲かった時代だった。

少なくとも九十年代の半ばまでは、私にとって不況など他人事であった。

やがて時代の冷たい風が吹き抜けて、風景が変わった。けばけばしい芝居じみた書割りが夢のように吹き飛ばされ、瓦礫のような無残な光景が、あとに残った。

宴の記憶の色彩も剥げ落ち、人よりも多少長かった私の青春は終わり、葛木宗太郎という髪の毛が薄くなった初老の小太りの男の体がみすぼらしく残った。

それは薄野原の真ん中で、狐に化かされた自分を発見するようなものだった。

美術や芸術というお祭り騒ぎに潜り込むことで、長いこと避けてきた現実というざらざらした地べたに、私は放り出された。つまり、借金を抱えた私は、もはやパトロンでも保護者でもない

、ただの世間知らずの人生の失敗者なのであった。

いま画廊を手放すにあたって、私とて一抹の淋しさを、感じていないわけではない。客のいない午後、ギャラリーの狭い洗面所や階段を、さまざまな懐かしい思い出に胸をしめつけられつつ、嗚咽をあげながら野良犬のように何度も歩き回った。

数年前からは、画廊だけではいかんともし難いので、伊万里や九谷の通信販売にも手を染めた。まさに悪あがきである。最初の頃こそ、数十万の染錦や祥瑞手が出たものの、あとはぱったりだった。

おまけに景德鎮にコネがあるという横浜生まれの中国系のブローカーに、金を持ち逃げされてしまった。これが致命傷だった。

こんなにこっぴどく人に裏切られたのは、生まれてはじめてだった。私の幼稚な性善説は、泥靴で踏みにじられた。人の良さへの軽蔑は、次第に悪意へと変わるらしい。積み重なる借金の総額は、到底いまの私に返済できる額ではなかった。もがけばもがくほど、嫌な色をした金銭の沼地に沈んでいく。DMの制作費、郵送費も馬鹿にならなかった。ある時期から、私は意図的に知人や友人との交友を絶っていった。

人間は、こうして世間の水平線からずるずると一人沈み込んでゆくのだろう。蒼白い孤独な水死人のように。

それまで画廊の経営についてはいつも見て見ぬふりをしてきた妻の悠美江も、ヒステリックに泣き喚いた。年の離れた美大出身の妻で、以前画廊でアルバイトをしていた娘である。寒がりな娘で、ほっそりとした肩にショールをかけながら画廊の椅子に座っている姿に、私は惚れたのである。最初の頃は、彼女の他愛のないわがママが魅力的だった。以前は愛情表現にも聞こえた「あなたのお人好しぶり」が、棘のある厭味として使われた。

「夢みたいなことばかりいってるから結局、最後は食べ物にされるのよ。ずっとあなたのこと見てきたけど、いつもそうだったわ。周りの人たちに、本当はちっとも尊敬されていないってことが、これで痛いほどわかったでしょ」

食べ物にされるなどという言葉は口にするような女ではなかったはずだ。家計がきつくなったある時期から、連れ合いへの思いやりよりも、甲斐性のない亭主をつかんだ己の不運への呪詛の感情の方が上回ってきたらしい。

かつて私が美術界への橋渡しをしてやったはずの作家たちは、今では挨拶にも来ない。町で出会っても知らん振り、印刷だけのそっけない年賀状がくるのは、まだしも礼儀を知っている方だ。なるほど、彼らにとって私は、世に出るためのただの通過点に過ぎなかったらしい。

追い詰められた私は、口ごもりがちになり、冷笑と自嘲ばかりを口にする魅力のない男になりはてた。かつての気の利いた余裕のある受け答えが出来なくなった。

若い頃、確かに私は自分でもそれなりに魅力のある人生を送っているつもりになっていた。しかし、美術雑誌のインタビューで活字になったあの挑発的で軽妙な会話は、私のユーモアではなく、若さの生理からくる凡庸な傲慢さのあらわれに過ぎなかった。

私は自己嫌悪のあまり、書斎に閉じこもりがちになった。

そして親父の形見だった籐椅子に身を任せ、藤棚の向こうに落ちる夕陽を眺めつつ、マーラーの曲ばかりを聴いていた。厭世観とニヒリズムと諧謔と突発的な生の賛歌、そして魂の消え入る

ような美しい透明な藍色の旋律。特に交響曲の五番と七番が好みだった。あの暗い酸味のある禍々しい音の響きに、奇妙な慰めを感じていた。

夕餉の食卓も、この半年の間、暗く冷えた時間となった。

高校生の末娘の満紀子との会話もしばらくとだえていたが、先日、久しぶりに口を利いてくれた。

「高校出たら、働くことにしたんだ。でも別に、親爺の画廊がつぶれるからじゃないよ。敬老精神なんて、オレ持ってないしね。要するにお勉強ってことに意義が見出せないんだ」

体格の良い娘は、丸みを帯びはじめている背中をリビングに向けたまま、肘を大きく上下に動かし、硬く冷たい洗い物の音をさせながら喋っていた。

「満紀子は美大に進むんじゃないのか。大学ぐらい何とかなるさ。芸大は無理としても、武蔵美でも、多摩美でも、受けてみたらいいじゃないか。あのな、その…オレというのは、やめなさい」

「みんないってるもん。一人称ぐらい自由に選ばせてよ。それに、アーティストに大学は関係ないじゃん。絵は描いていくわよ。本当はね、金属彫刻がやりたいの。イタリアの作家に弟子入りたいとか思ったし。うーんと、でもそれよりか、資格取って社会に出たいわけ。職人とかって、カッコいいじゃん。心配しなくていいよ、専門学校の学費は自分で稼いで出すから」

これは親への思いやりなのか、諦めなのか。最近は母親に隠れてタバコを喫っているようだ。長男と長女はすでに就職していて、遊びの方が忙しいらしく、父親のことなど洩もひっかけない。

実はこの末娘のことで気になることがひとつあった。

先日、何気なしに満紀子のパソコンを借りようと部屋を覗くと、娘は食い入るようにあるインターネットのサイトに見入っていた。

私が仰天したのは、その画面に手首を剃刀で切り刻んだ少女の画像が映し出されていたことである。

ウイナーソーセージのように、斜めに幾筋も切り刻まれた手首のアップの写真。

複数の刻みの入れられた無残な片腕をだらりと垂らして、血染めの下着をつけた少女。さすがに写真の目には黒いテープが入れられ、顔は隠されていたものの、背筋の冷たくなるような画面だった。

「なんだよ、オレの部屋に勝手に入りやがって」

娘は私の気配に気づくと、雑誌を投げつけた。

「そんなもの、見るんじゃない」

「関係ねえだろう」

そんな苦々しいやりとりがあって、私は娘を怒鳴りつけた。

そしてふさぎこみ、タバコを買いに外に飛び出した。

「学校は、ちゃんと行ってるのか」

——久しぶりに会話すると、そんな言葉しか出てこない。先日の件もあって、私はあまり刺激しないように尋ねた。

「なにが？ だいたい学校へ行っても、授業になってやしないもん。それにうちの学校、先生だ

って馬鹿ばっか。大学院出ててもちっとも知的じゃないしき。勉強をしたけりやき、いまの時代、ネットや電子事典で、いくらでも方法はあるって」

質問には答えてもらえなかった。

きつい物言いが若い頃の妻に似ている。

娘のいっているのはそれなりに一理あるだろうが、何かが間違っている。

いつからこんな娘になったのだろう。自立心旺盛なのはいいとしても、大学の意味がかつてとは違ってきたのだろうか。

しかし私は、娘に何ひとつ言い返せなかった。

私はいまや確信のない優柔不断のまるで生気を失った男に成り下がっていた。

かつて軽蔑していた人種に自分自身が似通ってきたとき、人はその恐怖をどう受け入れるべきなのだろうか。

それが私の最近の課題であった。

——私はバーのカウンターで、訊かれるままに丸いサングラスの男にそんな四方山話をしてみた。男は骨っぽくて黄色い両手を組み、そこに薄い鬚の生えた三角形の顎をのせ、黙って聞いていた。

もう、恥も外聞もない。

高円寺の家もわずかな不動産も、この先どうなるかわからない。私はしばらくの間、いまの時代を罵っていた。

吐き出すものを吐き出してから、葛木宗太郎という名前を告げ、しばらくの間、世間話をした。大学が同じであることが、途中でわかった。

服装があまりにも古臭く、名物男のようになってしまったドイツ語の老教授の話をして、懐かしい話題となった。

「まあ、みんな人間が小粒になって、ぎすぎすしてきたということですよ。生きるに精一杯で、夢なんか持ってないんです。この人生への探究心もね。それでいて賢くなったと思い込んでいる。そうそう、申し遅れましたが私、菅生英二と申します。生業は、まあ、あまり大きな声じゃいえないが……人間の名前を売り買いしております」

「人間の、名前？」

男はタバコの煙を真っ直ぐに吐いた。

「ええ。つまり名簿をね。非常に質の高いリストを。大手の通販屋が、涎垂らして喜ぶようなやつをね」

「なるほど」名簿と聞いて、私の虚ろな心が動いた。

高額所得層を集めた密度のいい引き締まったリストは、金を生む畑なのだ。

「私はねえ、何年も前からこの種のリストを作る仕事をやってきた。膨大な数の人間の年収データと、商品の購入履歴。なァに、ヒントはいくらでも転がっている。いまの世の中、この種のデータは公然の秘密というものでね。私は時間だけはあるあまつ着ている学生バイトを使って、あらゆる角度から立体的で精密な、しかも力のある名簿の作成を行ってきた。このデータがあれば、正確な販売促進のピンポイント攻撃ができる。自慢じゃないが二流のマーケットターでは決して気づかない幾つかのツボも発見したんですよ。これやってるとねえ、それこそ女の服を一枚ずつ脱がせていくように、世間の消費や購買傾向のナマなでこぼこが、あらわに見えてくるんだ。何が個人情報保護法案だ、もともと素っ裸じゃねえか。金というのは、そのグラマラスな体を流れている生温かい血液なんです。興奮しますよ、これは実際」

「……お得意ですな」

「そう聞こえるのは、あなたが卑屈になっているからだ。おやめなさいよ、自嘲は。あのね、読んでるんですよ私、昔の美術雑誌。まるであなた、芸術運動でも旗揚げするような鼻息だったじゃないませんか。美術評論家と対談しちゃったりしてさ。なかなか、格好良かったよ、ふふふ、葛木さん」

「つまらん記事です。若気の至りってやつですよ。あの当時は勢いだけで、何もわかってはい

なかったのです」

私は無然として、グラスを乱暴に呷った。

「人間はねえ、他人を食い物にしているときに、いちばん生き生きしているんだ。生き血を啜っているときにね。それだからこそ、この世は面白い。私の扱っている商材は、人間に関するあらゆるものです。それこそ、天国の扉から地獄の釜まで売ってますよ。最近、台湾製インポテンツの治療薬の広告を三流男性誌に出して、通販でごっそり儲けさせてもらった。携帯の客も巻き込んで、一工夫したネットとの連動の仕方をしたんです。商材なんか、なんだっていいですよ。魚影の濃いところに、餌を撒く。魚群が反応しさえすればね、なんでもいい」

「そういうものでしょうな」私もかつてはこんな自信たっぷりに語ることもあった。

つまりは、人生という、ゆっくりと回転する観覧車の向こう側とこちら側の風景に過ぎないのだ。

上昇の勢いのある者と、失速し下降してゆく者。

「それと私、廃墟ビルのイベントプロデューサー、でもある。空いている空間の有効利用だ。昔、演劇の世界の隅っこにいたことがあるんで、そんな流れからね。まあ、あなたのやってきたこととまんざら縁がないわけじゃない。この界限じゃね、ちょっとした有名人ですわ」

「どんなことをされるのですか、プロデューサーといっても」

金の話ばかりでうんざりしていたので、私は始めて興味を持った。

というよりも、金銭に関する話に触れると、私にはすでに冷えた風の吹き込む恐ろしい風穴に身を浸すような気持ちになるのだ。

「それはあとでのお楽しみ。今度の金曜日は、お暇ですか。面白いところにご案内しましょう。いや、私は本当は、あなたみたいなしみじみとした人間が好きなんだな、先輩。すれっからしばかりだと思っていた画廊業界にも、あなたみたいな人がいるわけだからねえ、世の中まだまだ奥が深いや。ねえ、葛木さん」

「くたびれているだけですよ、人生に。世の中に。それはいいですけど。あらかじめいつときませんが、私なんか相手にしても、酒の肴にもなりませんかね。いまじゃ、筆られつくした老いぼれの鶏です」

「……少し私と、憂さ晴らしをしてみませんか。なあに、あんたから筆り取ろうってわけじゃない。カモなら、私にはいくらでもいる」

「カモにもなりませんか。そうか、カモにすらなれないわけだ、私は。カモにすら…」

「またそれだ。ねえ先輩、少し元気出さないよ。なに、またいつか、いい波はくるさ」

「その前にこっちは、くたばっちまいそうですがね。いまの世の中、なんでもかんでも、勝ち負けだからね。一度負ければ、どこまでも。人生なんて、つまらないもんだな。人生というものは」

私はそれ以上まともな言葉にならず、発音すら湿っぽく曖昧になり、思わずウイスキーグラスを強く握りしめた。

続ければ愚痴になるのが見えていた。

しかし私は、その顔色の悪い痩せた菅生という男に、興味を持った。

昨年奥さんを膵臓癌で亡くしたという痩せた初老のバーテンは、ぎっしりと並んだスコッチやバーボンの琥珀色の壇を背にして、始終黙りこくって微笑んでいた。

それはいかにも生きる精気を剥がされた微笑らしく、こうして見ている間にも、目や眉の色が少しずつ薄く色あせていくようであった。

「本当のことをいいますか。お察しの通り、私が手を染めてきた仕事は、そんな可愛いものじゃない。名簿どころか、人身売買だ。フィリピンや中国の女を、日本人のホームレスや行方不明者と戸籍上偽装結婚させる。それが暴力団や新宿の中国マフィアに高く売れる。何でもやりましたよ、私は」ぼそりと菅生はつけたした。

昔、役者か演出家を志望し、演劇の世界を知っているらしい。

アートや絵画にも感心があるらしい。大きなことをいっているが、いろんな職を渡り歩き、美しいものや醜いものを、右から左に動かして食って生きてきた寄生虫のような人間なのだろう。

その夜、菅生は長い指で、器用にピーナツの皮をむきながら、薄く囁くように語りつづけた。「つまるか、つまらないか。葛木さん、世の中には、いまのあなたみたいな暗澹たる気持ちのときにしか見えてこない街の奥の次元があるものです。街には幾つかの層があつてね。何十年もその町をうろちよろしていながら、ある心の層に入り込まないかぎり、見えてこない一角がある。扉が、開かないんです。不思議なもんだな」

私はいわれるままに、男の屁理屈を聞いていた。

十一時半。夜の銀座コリドー街では、バーの狭い階段から降りてきた女たちが、白い背中や豊かな乳房を白くさらし、嬌声をあげていた。ずんぐりした中年男たちの肩に抱きつき、男がタバコを出すと、むっちりとした大きな桃のような乳房を男の脇に押しつけるようにして、銀色のライターを差し出した。

このふんぞり返った男どもは、バブル経済の崩壊に耐えて、同業者をすっかり揺さぶり落とし、いまでは敵のいないような大手企業のお偉方たちであった。

中には三十代と思いき若い経営者もいた。ここはいわば森の生態系のようなもので、ライオンや虎や象は堂々と水辺で日向ぼっこをし、私たちのような小物のハイエナや穴熊の類は、びくびくと首を竦めて、日陰の裏道を足早に歩かねばならない。

真昼の陽光を浴び続けるハーフミラーのビルの森は、食うか食われるかの弱肉強食が原則なのだ。

黒塗りのタクシーが男たちを乗せて、ゆっくりと表通りへと消えてゆく。ごつごつした石畳が、夜の街の光を浴びて、石榴色に耀いていた。

すでに経営が危ぶまれているという帝国ホテルの巨きな崖のような灰色の壁面が、ぼんやりと煤煙の中に浮かぶ。

「次回は、名刺をたくさん用意しておいてください」

私と菅生は、二人で有楽町方面に戻りながら、泰明小学校脇の薄暗い舗道を別れていった。

路地の奥の入口

――金曜日。

現実から逃げ出したい焦燥感とほんの好奇心から、私は約束の時刻に、西五番街の喫茶店に入ってしまった。

炎天下、サウナ室の湯気のようにうごめく夏の昼下がりの大気が、ビルを薄灰色に染めていた。

瞼にまで汗が滲み、ビルもガラスもゆがみ、何もかもが不吉な夢のように見えた。不安定な気分だった。どうも先日テレビの健康番組でやっていたメニユエル氏病ではないかと思う。ストレスのために、三半規管の平衡感覚が狂う病気だ。

借金のことが居ても立っても頭にこびりついて離れない。不安神経症からか、ドブ板に唾を吐きつづける。変な癖がついたものだ。

いまの世の中では、債務者であることは、まだ自首していない犯罪者に近いのだ。

焦りの気持ちしがじりじりと夏の太陽光線にあぶられ、額の脂汗となってじっとりと幾らでも滲み出てきた。

心臓の動悸も、不規則になっているような気がする。

誰でもいいから味方になってくれる人間に会いたかった。

何か薬に頼るべきだろうか。医者に行くべきだろうか。

昨夜も三時頃、寝ていていきなり体が跳ね上がり、カーテンを握りながら荒い呼吸をしている自分に気づいた。寝苦しさの中で、何か濁った悪夢を見ていたような記憶があった。明かりの落ちた寝室に、空調の物憂い音だけがかすかに響いていた。

妻がみっともない髪をして寝返りをうつのを横目で見ながら、私は呼吸をなだめつつ、わびしく煙草に火をつけた。

ふと見ると、暗い鏡に背を丸めてベッドに座っている孤独な男の姿が映っていた。

その日、私が待ち合わせに指定した店は、深紅のビロードに覆われた体が沈むようなソファのある時代遅れの店だった。

銀座にもスターバックスが何店も進出しているが、ここは昔ながらのなじみの喫茶店だった。

私がこの店で気にいっているのは、インテリアは古めかしいくせに、マーク・ロスコや、シヴィラ・ラスキル、サム・フランシスの絵がさりげなく壁に掛けられていることだった。彼らの美しく澄んだ色彩が、痛んだ心に沁みてくる。

私の好きなロスコは、ロシア系ユダヤ人の画家で、後年鬱病になり自殺した。

菅生がサングラスをとって顎をしゃくり上げて扉の前に立ったとき、逆光が彼の輪郭を紫色に縁取った。死神みたいな奴だなど、私はつぶやいた。

菅生と私は、店の隅で声を響めてしばらく話した。

店を出ると、車のボンネットが密集してまばゆい銀のモザイクのようになった晴海通りを過ぎ、銀座のビルの谷間をさんざん歩かされた。

菅生は、尖った顎をなでながら、なぜか巨大なビルとビルとの間の暗く狭い路地を、跳ねるような足取りで、好んで歩いた。

そこには、表通りとは違って、料亭やブティックの裏口が続き、白く埃を被ったアロエや松の植木鉢、作業着やタオルなどの洗濯物、業務用の旧式の自転車などが、雑然と混ざりあった生活臭の強い風景だった。

よほど銀座の裏道に詳しくなければ知らないような一画だ。

路地の上を見上げると、細く切り取られた紺色の明るい夏の空が見えた。

彼が案内役のメフィストフェレスならば、私は人生の途上で方向を失った貧相でちやちなファウストだった。

くらくらする。喉がしきりに渴く。メニエル氏病かも知れない。

野良猫が、いぶかしそうに私を見る。直射日光が激しく車体に照りつけ、ボンネットが溶けた金属のようにゆがんで光る。夥しい通行人の灰色の淡い影が黒い影に重なり、亡霊のように通り過ぎていく。ぐったりとした街路樹の影は、董色のまだら模様になっていた。雑踏の中で足がもつれた。

私はまた、ドブ板に、唾を吐いた。アスファルトを焼くような日が照りつける。動悸がしてきた。道端にしゃがんで、少し休みたくなった。

表通りの新しいビル群を過ぎ、裏道に入り込んで、迷路のような角を回った。

――ふと、周囲の気配が静止し、見知らぬ一角に入っていた。

ビルの側面に夥しい電線が走り、背の高い雑草が繁っている。曇った古い瓶類。使われていない木製の椅子やテーブルが、雨ざらしのままうずたかく積み上げられている。閉鎖した店の色褪せた看板や、ペンキの剥げ落ちた木材が、雑然と人気のない路地を飾っていた。

その奥に、コリント式風の立派な大理石の円柱を持つ、古めかしい白い石造りの建物があった。ギリシャあたりの小さな神殿を模したような忘れられたような建造物であった。

灰色の荒れた壁には、濃い緑の蔦が這い、古びた鉛のパイプが走り、ざらざらしたコンクリートの割れ目からは、冬の間枯れた灰色の植物がからみついていた。

装飾的な白塗りの扉を開くと、くすんだ緑色の石を敷いた廊下が、窓から射し込む光に鈍く耀いていた。

左右に今はもう使われていない古風な事務所が奥へと並んでいる。うっすらと埃を浴びた古い表札が覗き、ひっそりとして人気はない。

入口の背後に、ずいぶん昔のものらしいマネキン人形が、廃材とともに裸のまま積みまわっていた。

長い手足をつっぱり、痴呆のような青い目で、思い思いの方向を見ていた。マネキン人形たちは、薄ら明かりの下で、鳥肉屋の店先に積みまれた肌色の冷たい肉塊のようにも見えた。

正面の奥には、地下へと続く目立たない階段があった。そこには、しいんと冷えた空気が堆積していた。真鍮製の金色の手擦りが、下方へと伸びている。

私は促されるままに、菅生のあとから、地下へと降りていくことになった。

不動産会社の都合で意図的にほったらかしにされている意味ありげな地所なのか。むろん四方のビルとビルの背に完璧に囲まれて、そこだけ往来の視線から遮られ、時間の止まってしまったような空間は、どんな活気のある街にも残っているものだ。

それにしても、長年銀座の一角で商売をしてきたのに、こんな裏路地の一画があるとは知らなかった。私には、これまでまるで死角だったようだ。

石の階段は、私たちの硬い靴音を響かせた。

「いまの世の中、敗残者なんかね、いっぱいいるんだ」

菅生は階段の途中でふと立ち止まり、誰にいうともなく、そう嘯いた。

煙草の白い煙が、薄ら明かりの宙に、ふっと舞い上がってきた。

私にいったのなら、これは失礼ではないか。

「人間、下を見ればきりが無い。というわけで今日は、その下というものを見せてあげましょう」

その冷ややかな声は、木魂のように地下通路の壁に響いた。

私は、菅生の態度が次第に不遜になっていくのを小面憎く感じた。

先日は、先輩先輩とって、形だけでも私を立てているふりをしていたのに。

それにしても、この廃墟の神殿のようなビルの地下が冷えているのはなぜだろう。

何回か薄暗い踊り場を曲がった。

廊下が幾つか覗いていたが、さっきから何階下りたのかわからなかった。壁にも床にも階数表示がなかったように思う。

私はまた動悸が激しくなり、胸を抑えた。

私たちは、古めかしい病院の霊安室に向かう地下道のような廊下に入った。

昭和三、四十年代に建てられ、何度も作り直した空間のように見えた。

罅割れたタイルや、壁に嵌められた曇りガラスの窓が、燻ったような色調を一層強めている。

あたりには水のような冷気が沈んでいる。

数十メートルほど、無言で進んだ。私は、二メートルほど先に行く菅生の背中を、憎み始めた。

正面に扉らしきものがあつた。目が慣れてくると、黄色いペンキでまだらに塗られた鉄の板に『聖萬門教会 St. MANMONS Church』という筆書き文字の木札が下がっているのが見えた。

その重い金属扉を開けると、いきなりアジアのどこかの市場に迷い込んだような強い臭気が鼻をついた。

地下駐車場を改造したようながらんとした薄暗い大空間が広がっていた。教会？ 私は、不審に思った。誰が何のためにこんな場所を作ったのか。

闇の中、蒼白く太い柱が、太古の神殿のように幾柱もぼんやりと浮かんでいる。

その地下の世界は、全体の空気が異様に重く歪んでいた。

何か埃でも混じっているのか、私は辺りの空気に言い知れない抵抗を感じた。

「千客萬来」と墨で書かれた油じみた巨大な赤い紙が、壁にだらりとかけられてある。

まるで中華街の老舗の大飯店のようだ。

他にも、紅色や黄色で毒々しく「福運招来」「喜喜」などと書かれた大きな額が壁に立てられ、蝋燭の光で下方から薄気味悪く照らされている。

薄汚れて剥げ落ちた壁、蛇のように這う配線、積み上げられて傾いた木箱の山。昔、九龍城塞の奥にあったといわれる阿片窟めいていた。

広間の中央には、巨大な陶製の像が控えていた。仏像の類ではなく、象だか牡牛だかわからない化け物の像が、薄気味悪い笑みを浮かべていた。

赤褐色の香炉を前に、祭壇の炎に赤く照らされ、てかてかとした奇怪な底光りを放っている。新興宗教の勧誘かも知れないと、私は訝った。

地下神殿の宴

地下空間の内部には、意外に多くの人間の影が蠢いていた。

多くは中年かそれ以上の男たちで、ときどき三十代ぐらいの女も混じっていた。

皆、身なりもきちんとしている。

ところどころ柱が立っており、林の中を覗くような状態だが、少なくとも若者らしき人影はいないように見えた。

今の私には、騒がしいパーティーは神経にこたえる。

下からライトアップされ、不思議な光の多重円が天井に映し出されていた。

ひょいと、何かが柱の脇から顔を出した。黄色いタキシードを着込んだいびつな子供のような初老の男だった。どこかしら陰惨な印象だった。

「これはこれは、マネージャーの紹介？ 聖萬門教会へ、ようこそ」

男は、つるりとした顔をして両手をこすると、人を馬鹿にしたよう口調でいった。マネージャーとは菅生のことらしい。

関西のコメディアンのような金ぴかのラメの入った服装で、目には紫色のアイシャドウとつけ睫毛をしている。こんな格好は、サーカスにこそ相応しい。

「貴方様が、これからご覧になられあそばされるのは」

子供のような男は、私にワイングラスをつまんで差し出した。

「すべて聖萬門様にご供養されるアートでございます。そこんところは、ご理解のほどをよろしく。……聖萬門様は、この世の勝残り組の神様よ。ご縁があれば、貴方様にも微笑んでくださります」

妙な節回しをつけた奇怪な敬語でいった。

小さな手足を盛んに動かしているこの異形の男は、年老いたおカマのようだ。どこかで見たような記憶がある。

箱のような胴体についた長い手足が、蛙を思わせた。

ある時期テレビにも出ていた往年の子役だったろうか。とうの昔に売れなくなり盛りを過ぎた子役ほど、頹廢的なものはない。

嫌なきいきい声が、耳につく。

「ねえ、旦那。断っておくけど、これ、カルトじゃないからね。内輪の社交クラブ。でも、あたしたちの遊び場、奪わないわよね。告げ口したり、しないわね」

往年の子役は齧歯類じみた前歯を突き出し、下品な感じでいった。

こちらが戸惑って曖昧な笑いを浮かべていると、その不器用なそぶりが気に食わないのか、いきなり凄みのある割れた声色を使い始めた。

「ちよいと。何おすましてんのよ。あんたはいままで、こっち側にいたかも知れない。けれどもこれから、あっち側に墮ちるかも知れない。墮ちる前に、よく、見ておくのね」

いびつな体つきをした子役は、目が飛び出そうな怒気を含んだ顔をして、吐き捨てるようにいった。

私が憤然として「どういう意味です」というと、菅生が手で制し、笑いながら

「まあまあ、これも余興のひとつです」といった。

「彼はここの、道化役です。私が雇ってる」

ユーモアたっぷりに見せかけてはいるが、いかにも巷の辛酸を嘗め尽くした芸能人崩れの荒みきった毒が、私には耐えられなかった。

奥の暗い排気口へと風が向かってゆくせいか、ゆっくりと垂れ幕がゆれ、下の方がめくれあがった。

地下通路を満たしていた冷気は、どうやらここから流れ込んできているらしい。

いきなり、私のすぐ頭の上のスピーカーから、大音響が響いた。

オルフ作曲の「カルミナブラーナ」だった。暗い焦燥感に彩られたようなせつぱつまった混声合唱が、柱と柱の間の空気を振るわせた。

先程までは、リュートやビオラダガンバを使った中世古楽が低くかかっていたようだ。

私は、香の煙のたちこめた中央の祭壇に立っているグロテスクな獣の陶器像を、再び眺めた。燭台の炎と煙の中にぼんやりと浮かび上がるその顔は、神か化物か、さだかではない。

願い事でも書かれてあるのか、極彩色の夥しい短冊が、太い首にかけられている。聖萬門とは、マンモン神のことか。聖書で否定されている金と物欲の神。天の神に敵対する地上の力の根源。巨大な極彩の顔面は、ヒンズーの象神ガネーシャと、バビロンの金の仔牛の合体獣のようにも見える。その姿形は、「象牛」とでもいったら近いのかも知れない。香港や台湾あたりにある関帝廟の極彩色の煙まじりの厚ぼったいような雰囲気にもよく似ていた。むっとするような香の匂いが、いちめんたちこめている。

なるほど、いかにも演劇畑の人間の演出らしい。しかし昔のアングラ演劇を見慣れた私には、いまさら驚くほどのことはない。

背景の壁には、呪文のような文字の書かれた薄汚れた軸がだらりと下げられていた。

「生生生生始冥

死死死死終暗」

ご丁寧なことに、ふり仮名までつけられている。こんなところに空海の言葉を使うのも、悪趣味な話だ。

——うまれうまれうまれうまれて せいのはじめにくらく

——しにしにしにしんで せいのおわりにくらし

不意にぱちぱちと炎がはぜて、明るく大きく燃え上がった。いかがわしい邪教の偶像めいた二本の角のある獣の頭部。でっぴりとした金塗りの顔に、瑠璃色や赤の模様が、濃い色合で塗られてくられている。

炎のゆらめく光に炙られ、焰の形によって姿を変え、闇に浮かびあがる。

目が次第に慣れてくると、あちこちで異様な光景が広がっていることに気がついた。濃密な霧の中から、山里の村々が朧げに現れてくるような曖昧な視界だった。

カタコンベのような空間に、ところどころ屋台や小市場のようなものが開かれている。煙草は

制限されていないのか、香と混じった煙の塊が、白くぼんやりと浮いていた。広い天井から幾本も下げられている灰色がかった紫色の垂れ幕が、またゆっくりと暗く風になびいた。

微かに空気が吸い込まれていくような物憂い音が聞こえる。

全体の印象として、この地下の灰色のコンクリート空間は、いわば猥雑な見世物小屋のようなところであった。

しかし金曜日の昼下がりに、こんな地下室に集まっている人物たちは何者なのだろう。

壁の前で、一人の髪が長い女が、しきりに葡萄をつまんで大きな皿の上に並べていた。ときどき、自分の口にも素早く放り込む。

「ダリルの葡萄占い」とあった。魔女のように全身をマントのような黒衣で覆い、濃厚な化粧をしていた。暗く鈍い艶のある葡萄の実が、蔦で編まれた籠の中に山のように積まれ、その前で客らしい男が、女の指で葡萄の実を口に入れられて喜んでいる。

二人とも赤ワインを飲んでいて、幾粒も下に落ちて踏み潰され、床を汚している大粒の葡萄が、私には毒々しく不潔に思われた。まるで中近東のバザールにでも迷い込んだかのようだ。

「どうお客さん、カバラの葡萄占い、やらない？」

魔女めいた女は私を見ると、流し目をしてそういった。私は断った。

太い柱の影では、半裸体の男たちが何かうめきながら、のたうちまわっている。

柱には、筆書きの太い江戸文字で、「動物園」と書かれてあった。

それだけでも、悪意の籠もった冗談の気配が濃密に漂っていた。

悪意、この空間を隅々まで支配しているのは棘のある悪意と侮蔑だった。

汚れた壁の下に、奇妙にねじれた毛筆で、「毛虫、芋虫、蛇、蜥蜴、蛆虫」などと、気味の悪い虫や爬虫類の名前が書かれてあった。

ミイラのように痩せこけた老人は、長い手足で柱にぴったりとへばりついていて、破れかけた薄いTシャツの背中に、マジックインキで「ヤモリ男」と下手な字で殴り書きされている。

私たちが大きなおどおどした目で見上げると、

「雑巾がけでも、ドブ攫いでも、一生懸命、なんでもやりますんで、はい。谷野と申します。ヤモリの矢野、這いつくばって、生きております」老人は、赤く皺の寄った額を床にペコペコと擦りつけた。

「どうか私を、借金地獄から救ってください。お願いします。お願い、します。どうか、馬鹿にしてください。貴方様の軽蔑を、形にしてください。私のノルマなんです。今日一日の貴方様の軽蔑で、何とかわずかな食い扶持を稼いでおります。矢野謙二、這いつくばって、這いつくばって、懸命に、生きております」

爛れた赤い目をこちらに向け、嘎れた声で訴えて、暗くぎらついた律儀な目をして、土下座を繰り返した。安っぽい田舎の村長選挙のようだ。

いまの私は、同情よりもむしろ、恐怖と軽蔑の混じった苦痛を感じた。

あちこちの暗い床で男たちが蠢いている。毛布に包まっている者。膝を抱えたままじっと動かない者。低い声で誰も聴いていない歌を唄っている老人もいる。それぞれお互いに意志の疎通もない。

壊れた見世物。

まるで人生のゴミ処理場だ。

柱の隣では、黄色い大きな禿頭に「養豚」と書かれた半裸の太った男が、目を閉じて正座していた。豚のようにだぶだぶした太い薄桃色の腹をしている。

グレイのビジネススーツを着て腕組みをしたショートカットの女が前に立つと、豚男は、まんまるい顔を、腰に押しつけるようにした。

「ああ、お嬢様、私に何でも落書きしてください。女社長様ですか。お気の済むに、日頃の鬱憤を、ぜひ私めの体で、お晴らしてください。馬鹿でも、死ねでも、なんでもいいです。ここ、腹に書きますか、尻に書きますか」

そして下着を振って、左片方の皺の寄った力のない尻を、むき出しにした。黄色い肉の艶のない澱んだ老いた尻が現れた。奇妙なことに、養豚のような男の声は、美しいテノールだった。

「気持ち悪いオヤジだなあ、うせなよ」

びっくりした顔のショートカットの女は、下唇をむきだし、アメリカ人のように中指を突き立てて、怒鳴りつけた。

スタイルが良いためか、堂に入っている。海外生活でも長かったのだろうか。まるで日本の女とは思えない仕草だ。

たまたま隣にいた背の高い男が、面白がって太い脇腹を靴で蹴り飛ばしたので、よろめいた半裸の禿頭は、柱に後頭部をぶつけた。

「痛たたたア」と背を丸めて、頭を抱えた。

「ああ、どうか、有能な女社長様。IT産業の花形ビジネスウーマン様」

そして、すぐ傍にいた私を、泣くような、同情を乞うような顔で見上げると、柔らかいテノールで、歌うようにいった。

「ねえ旦那さん。ああ、また無視された。私はずっと人から無視されてきたですよ。そういう人生、餓鬼のときからずっと。あんなに優しく声をかけたのに、私が何をしたってんですか。その旦那さん、私を見捨てないでください。何か私の体を書いて、私の日々の糧をお与えください。お客様に軽蔑され、馬鹿にされることが、ここの査定なんです。私どもは芸無しなんで、そうするしか道がない。ああ、それにしてもこれから……。どうやって生きていったらいいのか。体も、そろそろきかなくなったし。何のとりえもないし。どうです、もっと嘆きましようか。もっと惨めに、わが身を責苛んでみせましようか」

男は両手を頭上でこすりつけるように合掌し「ナンマンダブ、ナンマンダブ」と唱え始めた。

そのハムの塊のような丸い背には、大きく青い文字で「生ゴミ」と乱暴にスプレー書きがされてあった。

まるで番号や分類記号が刻印された家畜のようだ。

私は目を伏せ、家畜男から立ち去った。

恥辱、屈辱と、引き替えに...

暗い天井や汚れた壁から、ひりひりと棘が食い込むような気配を感じる。

老朽化したビルの管や電線が壁を伝い、醜く絡み合っている。

ここは、はたして地下駐車場だったのか、倉庫だったのか。

いったい何に使われていた空間なのか、天井は煤煙で薄汚れ、さまざまな垂れ幕がかかっている。

まるでドイツ・バイロイトあたりの楽劇の壮麗な舞台のようだ。

全体を漂う気流の関係からか、それらが時に、ゆっくりとめくれ、舞い上がる。

あちらこちらに煙が漂っている。

いたるところに香炉があり、何種類もの香が焚かれていた。この地下空間はすでに縁日の夜店状態で、アジアレストランやエスニック系の屋台が店を出し、酒や肉が振舞われ、食物の匂いも籠っていた。

しきりに犬の真似をしている無表情の若い男がいた。

釣ったような細い目をして、全身を白いタイツで覆い、驚くほど体が柔らかく、片足を奇妙に左脚を内側に曲げ、微妙にかかとをふるわせて見せた。

耳の裏の蚤を捕っている仕草らしい。

これは確かに一見の価値のある芸だった。

しかし芸のない男たちの零落感よりも、よほど不快になる見世物であった。

頭部を反らし背中につけ、主人に撫でてもらおうと媚を売るような姿勢が、嫌になるほど犬に似ているので、吐き気がした。

ときどき釣ったような横目でこちらを見る目つきは、まさしく臆病な犬が吼えながら周囲の様子を伺う、あの目つきそのものであった。両手をぴったりと床につけ、皿の中のミルクをぴちゃぴちゃと舐めていたが、私を見ると、背筋を伸ばし、桃色の舌をだらりと垂らしてハアハアと息を弾ませ、目を耀かせてみせた。

体をぴったりと覆った白いタイツ姿が、何とも不愉快だった。

「何のつもりなんですかね、この人たちは」

私は無表情を装い、菅生に尋ねた。「いや、質問を替えます。どういうつもりなんですか、あなたは、菅生さん」

「簡単ですよ。人としていちばん屈辱的なことをやってみせた人間を、善意のお金持ちが、一人だけ窮地から救ってやろうというゲームです。つまり一定時間を限定してね。この中で一人だけ、借金を一部肩代わりしてもらえる。誰がいちばん人間らしいプライドを棄てて、下等な毛虫になりきれるかという競争です」

私は、喉の奥を締めつけられるような気がした。

「でもねえ、想像力がないんだな、このおっさんたち。頭がない。経済は心理だということがわかれば、いくらでも抜け出せる知恵の輪なのに。……あんたらは善意のお金持ちの皆様に分身の芸を売るパフォーマーだと教えてやったのに、まったく面白くない。これでもみんな昔は、町工場や小企業の社長や役員だったんだ。いわば、社員を顎で使っていたわけだ。ただのホームレス

をここに連れてきても、面白くないでしょう。なかにはエリート銀行員や大学の先生までいる。いまこいつら、その傲慢の罰を受けているんですよ。ちなみに、傲慢の罪とは、人間らしいプライドを、一丁前に持ったということの意味ですがね」

菅生はタバコを、うまそうに喫いはじめた。「しかし私がここで陵辱しているのは、こいつらじゃない。世の中の仕組みそのものなんです。誰もそいつをわかってくれない」

彼は踵に力を込め、タバコを踏み潰した。

どの顔を見ても、人としての尊厳が奪われていた。柱の下の暗がりでもいい年をした中高年の男たちが、みすぼらしい襤褸を着た格好で、腹ばいになったり、柱にしがみついて唸ったりしていた。牛や羊のように、四つん這いをしてしきりに口をもぐもぐさせ、反芻運動を繰り返している立派な体格の男もいる。

虫の真似、爬虫類の真似、家畜の真似。丸くなり、ぴんと体をそらし、また思い出したように、くるりと蹲る小柄な五十男。石の下にいる丸虫の真似らしい。

この薄暗い地下転がっているのは、まるでイギリスの画家フランシス・ベーコン描くところの人間のゆがんだ肉塊の世界だった。

表情や心を失い退化した不定形の肉。私は次第にこの人目を避けた地下倶楽部の目論見が見えてきた。壁や柱の周りには、小さなテントやダンボール箱があつて、ちょうど展示場のブースのような趣になっている。

そこに現代社会の敗残者たちが「出店」して、廃物同然となった自分の人生のスポンサーなり救済者なりを捜すのだ。精神的肉体的屈辱と引き換えに……。

煙の漂う薄闇の奥に進んでいくと、『人間市』と書かれただらりとした垂れ幕があつた。

コーナーには、厚みのある板を使ったちょっとしたカウンターバーのようなものがセットされ、その向こうに、数人の女たちが嬌声をあげながら集まっていた。

「本日の奴隷」と札には書かれてあつた。

女どもは皆、高級ブランドの服で身を飾っていた。一人の若い男が、腰に禪ふうの薄い布切れをつけ、円柱に立てられた十字架に括りつけられている。

なかなかの美青年で、まだ三十歳にはなっていないだろう。

髪も肌もつやつやしている。褐色の汗ばんだ腰布は、未開人でもつけていそうな下履きのようであつた。イエスの磔刑の恰好を真似ているのか。

《至急、パトロン求む。女性限定。――殺人・傷害以外なら何をしててもかまいません》

宣誓書のようなものが太い円柱に貼られてあつた。

写真の中の男は、メガネをかけた眉目秀麗な若い商社マンふうだつた。

磔刑の恰好をさせられている男本人らしい。

短い首にネックレスを重ね、歯莖のつき出た小猿のような女が、手に長い棒を持ち、裸の男の体をつついていた。

この女は、中腰になって棒遊びに熱中している。

褐色の筋肉質の体には、べつとりとオイルが塗りたくられ、前方に勃起した一点がきつく張り

出し、女たちの粘りつくような視線にさらされていた。

祭壇でゆらめくマンモン神の炎を受けて、青年の肉体は赤エイの皮膚のようにてらてらと照り輝いていた。

私はエル・グレコの青黒いキリスト磔刑図の陰影を思い出した。

「女も女ですが、あの男もどうかしてますな」と私が無然としてつぶやくと、

「いまの時代は、そんなこといってられませんよ」と菅生が冷ややかに応えた。

「なあに、あの男の体だって、女たちに弄ばれるだけの性的な魅力と若さ、つまり商品価値がある、ということなんだ。ふむ、よく鍛えた筋肉質のいい体だ」

無言で腕を組み、舌先で上唇を舐めていたビジネススーツ姿の女が、一步前に出て男の小さな乳首をつまんだ。

さっきの家畜男に「有能な女社長」と訳のわからないことをいわれたショートカットの女である。

「どうしてこんなとこまで堕ちてきたの。きれいな顔してんのにさア」

もう一人が目を伏せながら、男の臍の下の方へと指先を這いそわせた。

熱っぽいささやき声が交わされた。「どうれ、よくみせてごらん」髪の赤い猿のような女が、布切れを下にずらした。

火照ったような嬌声が、花火のように上がった。

女たちは、玩弄物を取り囲んだ猫の群れのように、生贄にされた若い男の苦悶の表情に、見入っていた。

赤や黒の衣服の暗い隙間から、二三の白い手が伸びて、マニキュアを光らせながら男の体を弄んだ。全裸にむかれた磔刑の男は、しばらくしてびくんとふるえて空を仰ぎ、喉仏を上下させながら、長い両脚をよじるようにした。

前列の女たちが、一瞬後ろに引いたので、その光景がこちらからもあからさまになった。

断続的な射精の白い飛沫が散ると同時に、再び上気した女たちの金属的で晴れやかな笑いが起った。

「よおし、この元気な坊や、買ったわ」

空になったカクテルグラスをかかげ、ビジネススーツ姿の「女社長」が、ぱらぱらと拍手をしながら、太い声でいった。

周りの女たちのひそひそ話を尻目に、得意そうに片手で男の胸板をゆっくりと撫で下ろした。そして事もなげに財布を出すと、青いマニキュアをつけた指先で、紙幣を数え始めた。

菅生が「高橋——」といって手を挙げると、すぐに担当者らしい背の高い男が飛んできて、愛想よく女の応対をした。

この後は、事務的手続きに入るらしい。ここの関係者らしい黒服の男が、祭壇の炎に何かを投げ入れた。

茫洋とした薄笑いを浮かべた象神の炎が、火口のように明るくぼうっと立ち昇った。十字架の下の汚れた空き缶の中には、数十枚の紙幣とわずかなコインが入っていた。

地域通貨としての「魂」

「お疲れ、ですか」菅生が横から私を一瞥した。

次第に憂鬱になってきた私は、黙りこくっていた。

「葛木さん。ここでは、恥辱、屈辱、自尊心が、つまり内面とプライバシーの冒涇が、貨幣価値をもつんです。ここでは心の傷、それが地域通貨なんです。他人の心を傷つける愉しみ、何だかんだいっても、それが人間という生き物の、最高の贅沢なんです。そういう市場をプロデュースしてみたんですよ、私は」

「何の意味があるのか、まったく私にはわからない」

「私はねえ、若い頃、演劇をやっていた時代から思っていたことなんだが」

と、菅生は黒メガネをずらした。「つまりは、生贄なんですよ」

「何の話？」

「人間にとって、最も面白く感動的な見世物は、生贄、サクリファイスなんです」

「それがどうしたんですか」

「ひとつの命、魂、あるいはプライド、そういう人間の芯の部分辱しめ、冒涇し、弄ぶことこそ、最後の楽しみだということです。しかも、社会的なすべてを失った人間が持っているものは、そういう心の資産だけなんです。人として、最後のものを差し出させる。ここに、形あるものと形ないものとの、経済的交換条件が成立する」

神殿の陶製のつるつるした化け物の周りで、赤あかとした炎が舞っていた。

「一言でいって、不健全なものを感じますな」私は怒りに唇を震わせた。

「いまどき誰が、健全なもんかい。しゃらくさいんだよ、この糞おやじ」

後で立ち聞きしてたらしい小男の老コメディアンが、不意に吐き棄てるようにいった。

私がふりむくと、男は「ふん！」と、そっぽを向いて、ワイングラスを二つつまんだ両手を前に差し出したまま、つかつかと去っていった。この男はどうしても私のことが気に食わないらしい。

「勝組負組なんていう、つまらん流行り言葉があるが、マスコミのいわゆる勝組というものはね、葛木さん。豊かさだけでは物足りないんだ」と菅生は声を強めた。

「ベンツや、豪邸だけじゃつまらないんだ。負組どもが目の前で、身も世もなく悶き苦しみ、救いの手を求める姿こそが、見たいのです。相手の生殺与奪の権を握っていることを、印象づけたいのです。それではじめて、この世で自分の人生の越し方を振り返り、にんまりとうなずき、悦に入り、心底プライドを満足させられる。そういう比較にしか、楽しみが感じられない。人間心理の罠です」

菅生はゆっくりと一呼吸し、

「これはあまり言い過ぎると、私の方もヤバくなるんだが……欧米の金持ち連中は、もっとひどいことをやっていますよ。中世以来の欧州貴族の古い血の名残りというのか、悪魔崇拝と結びついた邪悪な儀式ごっこをね。奴らは赤ん坊を使うんです。こんなものはまだまだ、農耕民族の牧歌的な風景だ。連中のは異端の黒いグノーシス派の流れをくむユダヤ密教なんだが、その集会に降

臨するのは、もはやキリスト教の神じゃない。もっと人間の心の闇に潜んでいる禍々しいものですよ。これはすでに公然の秘密だが、あの腐り切ったバチカンの奥の院も含めてね。奴らはその力の源泉を使って、後ろ暗い戦争や、株価や先物の操作、麻薬ビジネス、セックス産業を展開している」

「椅子がないかね、私は少し休みたいんだ」

菅生は壁に立てかけてあった椅子を、乱暴に片手でつかんだ。

「ここはまだまだ序の口だ。ヒトの自尊心の売買、これが私のビジネスです。名簿や個人情報から始まり、人身の売り買い、さらにその奥に、人のプライドそれ自体を商材とするビジネスがある。私のオフィスには、長年かけて作成した大金を生む手作りのリストがあり、そのデータから、幾らでも、人間侮蔑の新しいビジネスモデルを紡ぎ出すことができる」

黒メガネの男は、首を傾げて皮肉な笑いを浮かべた。

「何が芸術ですか、何が文化ですか。表現？ 創造？ 馬鹿ばかしい。誰が他人の自己表現に金など払うもんか。私はこうしてね、売れない貧乏役者の、飯代にも事欠く借金地獄の劇団生活から、浮かび上がったんですよ。食えなかった時代は、資格もないのにインチキ整体師の真似事をして、食いつないできたんだ。下北沢、阿佐ヶ谷、吉祥寺と、夜逃げを繰り返してね。アジアの女とホームレスをくっつけて、暴力団から金を貰った。やっとのことで闇金融の常連から足を洗い、いまじゃあんたの画廊の一本向こうの通りに、オフィスを持っているんです。苦労知らずのあんたが親から譲り受け、そして間もなく追い出されるはずの画廊、そのすぐ傍のビルの四階にね。どうですかね、先輩」

「その先輩というの、やめてくれないか。君から先輩なんていわれたかないよ」

「ここは、お上品な銀座という街の無意識層です。いわば裏銀座だ。人間の美意識やエレガンスとかいうものを剥ぎ取ったあとに残る林檎の腐った芯のような部分が、ここで見られるというわけです、先輩」

「もういい。もう、いいよ」

私は、崩れるように椅子に座り、心臓を押えながらゆがんだ顔で喘ぐようにいった。

荒廃した空気が地下の灰色の空間を移動し、どこからともなくまたうっすらとした雲のような煙の塊が漂ってきた。太い柱の影で、三人の男たちが一冊のファイルを見ながら、立ち話をしていた。

金縁のメガネをかけパイプをくわえた小柄な紳士、ダブルの背広を着て葉巻をふかしたでっぴりと太った人物、そしてラフなゴルフウェアを着たオールバックの白髪頭の大柄な人物。三人とも余裕ありげに鷹揚に構え、腕組みや後ろ手をして、お互いに理事長、専務、オーナーなどを持ち上げながら、自慢し合っていた。

そのこっけいな様を見ていると、無闇にむかむかしてきた。彼らの体型は、それぞれ狐、セイウチ、白熊を連想させた。彼らをあえて獣に見立てることで、私はひそかに溜飲を下げた。

セイウチが分厚い唇を開いて、芋虫じみた指で葉巻をくゆらせながら、口を開いた。

「飯田橋あたりの小さな印刷会社の経営者らしいね。年齢、五十六歳、家族四人。住所は、武蔵

小金井の団地住まいだ。経営者といっても、いろいろあるからね。この間、最後の挨拶に来た男だよ」

「哀歓を誘うなア、ねえ理事長。無能な、哀れな、運に見放された人間特有の人相を、してますな。こういう美を解する御仁は、きわめて少ない」

髪をこってりと塗り固めた金縁メガネの小柄な狐が、得意そうに眉をぴんとつりあげた。

菅生は、私が聞き耳を立てているのに感づく

「明日、自殺する予定の印刷会社の社長のプロフィールです」と耳打ちしてくれた。「どの方法を使うかは、まだわからない」

「自殺決行を前提に、あらかじめ、金が振り込まれている。どうせなら、家族にも少しばかりの金を残してやりたいというのが、人情でしょう。見世物としての死です」

正気なのか、こいつらは。また、心臓が苦しくなってきた。私は椅子に腰をかけたまま、しばらく呼吸を整えた。

アルバムがこちらにも回ってきた。

「あんまり、魅力ないね。つまらん。ありふれてるわ」

鷹揚な笑みを浮かべつつ、白熊が穏やかな口調でいった。彼は片手で自分の肩を揉みながら、先日のゴルフで筋肉が凝ってね、と二人に弁解するように温和に笑った。

私がファイルを覗いてみると、写真の男は、年齢よりも十歳は老け、頬のこけた人の良さそうな顔をしていた。

「まあ人間、落ちぶれると、こういう目に力のない顔になるんだな。個人的には付き合わない方がいい人相だ」と葉巻を太い指で挟んだセイウチ。

「そうそう、悪い運を引き寄せてしまうんだ。まあ、この手の奴は困りもんなんだよ。船の運航もできもしないくせに、航海を始めたがるから、ふふふ」と白熊。

「そこにまた、いわく言い難い渋い美があるんですけどねえ……さてと、プラットホームで脚が震えて失敗に、十万円」小柄な狐が、鋭くいった。

「という、と、轢死かね。それはないだろう。鉄道会社から、請求がくる。俺は車で排ガスを引き込んで、一酸化炭素中毒、睡眠薬つきコースに、二十万」

「うむ、どう見てもビルからの飛び降りだな、この顔は」

「いや、最近が多いんですよ、電車が止まるの。皆さんは電車使わないから、ご存知ない。帰宅時間に線路を覗くと、ついつい魔が差すのでしょうか。近頃の流行といたしますかね」と狐。紳士たちは、他人の自殺を競馬か何かのように賭事にしている。

私は、居たたまれなくなって、小さく叫んだ。

「人の死を、なんだと思っているんですか」

私はあの貧相な写真の人物に、少なからず感情移入してしまったらしい。三人の紳士は同時に私の方を振り向いた。

「あんたね、そういうのははつきりいいまして、通俗的ですな」

金縁メガネの狐が、整髪料できっちり塗り固めた頭をひょいと突き出し、私を侮蔑的に睨んだ。

。「何だね、お宅は見かけん顔だが。誰の紹介かね」

セイウチが、私の顔をじろりと見た。ずんぐりとした体型に、老人斑のある芋のような顔がのっているが、ぎょろりとした目は鋭く険しい。

「人間は豚と同じ動物でね、まるごと全部食い尽くすことができるんだよ。心も肉体も、死ぬ瞬間のドラマも」

太い首を片手でこすりながら、セイウチが無然としていった。

「一般論でいえばだ、人間に限らずどんな生き物でも、まあ、他の生き物の命を、貪り食うもんなんです。言葉でその事実を曖昧にごまかしているだけでね。生きるということの本質は、そういうもんです。これは、仕方がないことなんだなあ」

銀髪でオールバックの白熊が、自分ではわかりきったことの説教でもするように、しみじみとした笑みを浮かべていった。

「しかし、人道的にいても」私は、心にもない言葉を口にした。

「人道ですか？ 新聞でしか聞かない言葉だなあ、最近。アメリカ大統領しか使わん言葉でしょう。いや、アメリカさんが、安い命を投じて、いらぬ戦争やるのもですな、石油という、あれですわ、みんなを潤す高い価値を押し、世界経済を回すためにやるという、マクロ経済的視野からくる、人道上の崇高な必要悪なんです。何かを動かすためには、命をくべなきゃならんですわ。人の肉を。暖炉に薪を放るようにねえ。空想的な人権屋のきれいごとではなくてね」

白熊は、自分の言葉に何度もうなずいた。彼にはどことなくアメリカ南部の保安官のような鷹揚な趣きがあった。

「やめとけ、評論家ごっこは」とセイウチ理事長が、分厚い唇をめくりあげた。巨大な芋のような顔は、疣と老人斑だらけだ。

「そういえば、副大統領の会社は、南米やインドで傭兵をリクルートして、イラクの砂漠に送り込んでいいっていうじゃないの、ねえオーナー」と、金縁メガネの狐は甲高い声を張り上げ、鋭く視線を走らせながら、パイプの端を舐めた。

「騙されやすい若造の首根っこつかまえて、砂漠に放り出しているらしい。その辺で寝ている日本の浮浪者や新宿のホームレスなんか、どんどんアメリカさんが連れていけばいいんだ」陽気な白熊は、饒舌に持論を続ける。

「秩序というものを守るためには、多少の犠牲は必要だね。僕にいわせれば、人間は有能さを評価されたい。しかしその有能さとは、結局は戦争か、企業間闘争のようなそれに類する場こそ、もっともあからさまに力の差を見せつけられるんだな。どんな戦略を描けるか、これにつきる。資源の分捕り合戦以上に、敵を倒し、ライバルを締め付けて、自分の力を誇示したい」と白熊。

「まあ、国家も企業もお互いに貪り合うというのが、経済というものですな」

したり顔の狐。

「しかしオーナーも専務もさ、そういうカタい話が好きだなあ。やめとけやめとけ、評論家ごっこは」

でっぴりとしたセイウチが、白熊のがっちりとした肩を、ぽんと親しげに叩いた。

三人の男たちは、苦笑いしながら新しい酒を注ぎに行った。

私には、惨めな気持ちだけが残った。

ここでは私の方がよほど変り者のようだ。

この洞窟のような地下空間に充満している殺伐とした悪意と荒んだ好奇心のために、すっかり私は消耗し、口の中が苦くなった。

幸いに菅生は、カウンターの方で先程の高橋という男に何か指示しているらしかった。いまならこっそりと抜け出ても、気づかれないかも知れない。

わたしは出口を捜すために人混みを掻き分けていった。

――ふと、太い柱の後ろで、一人の女が何か無言劇のようなことをやっているのに気がついた。

そこでは例の嘲るような笑いや罵声はなかった。

息を殺して彼女を見ている観客が数人ほど囲んでいた。

照明の加減からか、柔らかい光が柱の片面を青白く浮かび上がらせていた。

ぽちゃりぽちゃりと、水の音が淋しげに聞こえる。

中央で盥の水に浸かっているのは、半裸の華奢な若い女だった。

このふとどきな倶楽部では、服装だけで人間の種類がわかる。

まともな恰好をしているのは、見る側、選ぶ側、与える側であり、見世物になっている者たちは、身を纏う権利すら奪われている肉塊なのだ。

大きな盥のような器の中に、女は髪を濡らし、あぐらをかいた恰好で浸かっていた。

この地下倶楽部にいる人間の中では最も若い。せいぜい二十歳ぐらいだろう。

いや、十代か。はっとするような美しい少女だ。

全体的に色素が薄いのか、北欧の少女のようにも見えるが、顔立ちは明らかに日本人であった。

ギリシャの巫女のような薄ものを纏い、濡れているのでぴったりと体に張りつき、乳房が透けて見えている。

しかし裸同然であることが異様なのではなく、幾つかの箇所から鮮血を流しているのがただならぬ印象であった。

髪が濡れてべったりと頭について、その下にまぶたをふせた大きな瞳が覗いている。他の「パフォーマー」にない透明な風情があった。

ここだけ別の静かな音楽、例えば地中海ふうの哀切な豎琴の音でも似合いそうだ。

少女はときどき低くうめき、ゆっくりと体を左右に揺らし、眉を寄せて悶えているような表情をつくる。

しかしそれはいままでの男たちの追い詰められた陰惨さとは違い、不思議に惹きつけられるものがあつた。

いちめんに酸っぱいような血の匂いがたちこめているにもかかわらず、それは嫌悪感なく見られる唯一の芸であつた。

あまりにも現実離れしていて、演劇の一場面のような夢幻的な効果が感じられたからかも知れ

ない。

しかし何という芸だろう。

凄惨さの彩りが美しい詩情であるような絵画的風景であった。

狂気のオフィーリアのような女は、悲しそうに揺らめく水を見つめながら、素早く何かをつぶやき、鋭く尖った光るものを、手首にあてた。

ずっと、細い三日月のような赤い線が走った。まさしく、血である。

よく見ると、手首や足首や体のいたるところに、たくさんの切り傷がある。小さな剃刀を、握っているのだ。

精神を病んでいるのか。だとすると、さすがに菅生の人間性に疑問が湧いて来た。

盥の脇には、茶褐色の石膏の塊のような、不思議なものが置かれてあった。

古い書物のようだ。

先程の担当者と立ち話をしていた菅生が、いつの間にか戻ってきた。

私は少女に魅入られたようになっていたのをごまかすために、

「実際に、体を傷つけているのですか」と、しどろもどろに訊ねた。

「ええ。いわゆる、リストカット、自傷癖というものの見世物です」

私の動揺を見透かしたような薄い口調で、菅生がいった。

私は、以前、末娘の満紀子が見入っていたインターネット上の切り刻まれた生白い手首の写真
を思い出して、身震いした。

「ここの客は、SMもどきじゃ飽き足らないのです。自殺そのものを芸にしてくれないとね。自殺芸、あるいは、自殺未遂芸。つまりは、自らを生贄にする芸ですな」

「世間の人々は、そんなものが見たいものなんですか」

いまさらながら、このいんちきメフィストに着いてきたことを、後悔した。

「いうまでもありませんね。平和な暮らしを営んでいる者ほど、残酷さが好きなんです。血腥い殺人事件のテレビ報道を、口を極めて断罪しながら、せんべいを片手に、興味しんしんといった顔で見ている団地の主婦はごまんといいます。お断りしておきますが、あの子が自分でやるということですからね。私はここでブースを与えているだけです。まあ、泥の中に咲く白い蓮とでもい
いましょうかな」

菅生はしれっとした顔で、節くれだった人差し指を立てて、黒メガネを上にはずらした。

私は喉から胸にかけ、まさしく泥のような抵抗物が、重く入り込むのを感じた。

この娘は、大学受験を控えた私の娘よりも、少し上ぐらいだろうか。

「去年、新宿の公園で、ホームレスに混じって暮らしていたのを、私が発掘してきた子なんです。ねえ、とてもきれいな娘でしょう。チサトといいます。この秘密倶楽部の、いちばんの秘蔵
っ子」

うっすらとした煙が前を過ぎてゆく。

長い垂れ幕が暗くゆれている。

「ホームレス、だったのですか」

少し、間があった。カルミナブラーナの打楽器群が、暗く雪崩打つように鳴り響いた。

「まあ、もっと詳しくいえば、彼らに神の教えを説いていた、と」

私は、暗い垂れ幕を見上げた。

「神の教え？」

「あくまでも、ホームレスたちのいうところによればね」菅生は私が関心を示したのを、愉しんでいた。

「ある冬の朝、突然、公園に現れたのだそうです。まるで天から降りてきたかのように。そして誰に頼まれたわけでも指示されたわけでもないのに、死ぬ間際の衰弱しきった老人の脇に座り額に手を当てた。

優しい言葉をかけ続け、三日間彼女自身はロクに食事もせずに世話をし、その老人は、彼女に見取られながら安らかに亡くなったそうです。それまで仲間たちが誰一人見たことのないような穏やかな微笑を浮かべて。周りは、ひどい臭気だったらしいが」

「突然、現れたのですか」

「誰もチサトの素性を知らず、幾つなのかも知らない。そして、その冬は何人かのホームレスが、彼女に見取られながら静かに死んだ。……奇妙な話です。ふとどきな新参加者が、酔っぱらって彼女にいたずらしかかったとき、公園の先住者たちは、本気になってその男を取り押え、中には泣いてそいつに殴りかかった者もいたらしい。

そして殴られた男は、どういうわけか、翌日から一転して、彼女の熱心な親衛隊になってしまった。およそ現代の新宿で、ありそうもない話なんですが」

「信じられませんな」

「彼女は、公園の住人から小さなテントを与えられ、夜、蠟燭を一本だけ立てて、浮浪者たちに独特の警え話をして、伝導をしていたといえます。

食事はいつも誰かしら、そこでいちばん上質な食べ物を供えてくれた。しかし彼女はほんの少ししか食わず、残りのほとんどを弱った者に与えたのです。不思議なことに、彼女はあれ以上痩せもしなければ太りもしない。チサトは、頭がおかしいかも知れませんが、善意なんです。こんなに、心のきれいな娘はいない。私みたいな罰当たりのヤクザ者が言うのだから、本当です」

菅生はそこまで語り終えると、問うような顔で私を見た。咳をひとつだけすると、眉間に皺を寄せ、煙草を出して火をつけた。

チサトという娘は、瞑目したまま祈るようにつぶやき、胸の前で両手を組み、唸り、十字を切り、天井を見上げた。と、剃刀を肩にぴたりと当てた。

わたしはごくりと唾を飲んだ。

少女は自身の体に、まるで他人のような視線を落としながら、ゆっくりと斜めに切った。

幾本も下がっている垂れ幕が、薄い暗がりの中で海草のようにゆれている。赤黒い壁が蠟燭の炎の明かりでまだらに染まっていた。

菅生は今までになく沈んだ投げやりな声で

「高橋、お客様にチサトの本当のお姿をお見せなさい」といった。

脇に控えていた背の高い若い男が、少女のトーガのような薄い服を、上からはいだ。

無頓着に両腕を垂らしている娘の白い華奢な裸体が現れた。

濡れた白い肌には、大小の錯綜した赤い傷や白い爛れが、廃家の破れた壁紙のように凄絶に切り刻まれていた。

音楽が終わり、聴いたことのある曲に変わった。

どうやらマーラーの五番らしい。

自己分裂と憂愁、聖性と魔性の混沌とした歯噛みのような音が、煙の中に渦巻いた。

チサトは後ろに立った高橋という男によって、無防備に両手をあげて子供がパジャマを脱がされるように、服を剥がれると、再び頭を垂れたまま、瞑目している。

「誰でも」とチサトは目を伏せて自らに言い聞かせるように、素早く唱えた。

「誰でも水と霊から生まれなければ、神の国に入ることはできない」

空気がそこで、不吉に静止したように思われた。

澄んだ美しい声だが、どこことなく割れたような響きがあった。

ほっそりとした体の幾箇所から、たらたらと半透明の血が滴り落ちる。血の模様は、まるで赤い糸の網のように細い身を彩っていた。

水と霊、と再び彼女はかすれた声でつぶやいた。

まるで見かけはSM映画の撮影現場のような光景だが、不思議に猥雑さがなく、むしろ敬虔な気配すら感じられた。

私には、少女の周りにぼんやりとした背光が射しているように見えた。薄明の中に閃光が走るような音響が、地下空間の煙草と香の煙の中に低く響いた。

不意に私は、我に返った。

「しかし、これはまずいでしょう、いくら何でも。法的にも」

「本人の意志なんです、すべて」

「まだ、子供じゃないですか。彼女は騙されてるんだ、あなた方に」

「それは違う。子供かどうか、話してみればわかります。彼女の使命感と、ここの倶楽部のコンセプトが不思議な接点を見出したんです。リストカットの聖少女、剃刀の聖女チサト様、というわけですよ」

菅生は腕を組んで、薄笑いを浮かべ、また神妙に口を閉じた。

このチサトという娘だけではなく、私には菅生という男そのものもわからなくなってきた。私に勝手な憎しみを抱いて、悪質な悪戯を仕掛けてきているのか。それとも切実な何かを告げようとしているのか。

見慣れた風景に死角があるように、この男の人格にも死角があるのだろうか。

剃刀が水滴をたらしながら、青黒く鋭く光った。

チサトは剃刀を静かに置くと、疲れたように肩を落とし、静かにこちらを見て、見物人たちに淋しく微笑んだ。

それから盥の脇に置かれていた茶褐色に染まった石膏の塊のように見えるものを、手に持った。その濡れた塊の真中に、親指を差し込み、ゆっくりと開いた。

それは、分厚い聖書であった。

何度も水に濡れてぼろぼろになり、太陽にさらされ、乾かされたかのようなようである。

自傷する聖少女

「……神は高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みを賜う。この言葉をご存知でしょうか」少女は辺りを見渡し、ゆっくりと口を開いた。

「これはバイブルにあるヤコブへの手紙の一節です。とても恐ろしい言葉です。これだけではありません。聖書にはいたるところに、世の中の秩序を逆様にさせる言葉がちりばめられています。この世で高められたものが低いものとされ、貶められたものが、祝福される。そしてそれは、神による絶対的な断言なのです。神は、こっそり、この世とあの世の、秘密を明かしているのです」

チサトは大きく眼を開いた。たどたどしい舌つたらずな口調なのに、どこか有無をいわせないような力があつた。

美しい髪が、薄くぺったりと張りついていた。

「不幸にも、この世で、富と力を持ってしまった者への、呪いの言葉です。神は、健康な生命とは逆のことを望んでいるのです。いえ、大いなる永遠の生命のために、私たちにこの世の命を破滅に至らしめることを、望んでいるのです。あの世では、闇が光になり、光が闇になる。

……私たちは高ぶります。どんなに心をくだいても、自我を持っている以上、愚かにも、たかぶります。生きていてだけで一秒毎に高ぶり、一分毎に他の者を侮り、顎で使うことを喜びとします。ああ、私はここまでのものになったのだ、と。ああ、私は人の上に立ち、ついに彼らを支配する側の人間になったのだと。そして美食と美酒を貪り、この世を謳歌します。しかし、死後は、その清算をしなければなりません。意識だけの世界に入っていったときに、魂の奥に染みわたり食い込んで同質化してしまったものが、今度は永劫に私たちの魂を腐蝕し続けることに、直面させられるのです」

先程の三人の紳士たちが、訝しげに遠目に彼女を見ていた。

「典型的な、弱者の屁理屈ですな」狐が小さく舌打ちし、冷笑するように、セイウチに囁いた。「つまり、ルサンチマンというやつだ。ここからすべての宗教ってやつが、芽を出しやがる。それこそローマ時代からいわれてきた賤民哲学です」

「俺はねえ、小娘が喋っている内容など、どうでもいいんだよ。金持ちのラクダは針の穴を通るとか通らないとかいう、あれだろ。そんなことより、一度あの細っこい体を、抱いてみたいもんだな」

でっぷりとしたセイウチが、太い胴体の腰で後手を組みながら、分厚い唇ににんまりとした笑みを浮かべた。

「うふふ。この娘はどうやら、ボクの明日のゴルフの楽しみを、興ざめなものにしたらしい。明日は朝から那須だから、今日は早く引き上げるとするかな。悪友どもにつかまらんうちに」

白熊はゆったりと微笑んで、両腕を伸ばして、おもむろにスイングをする真似をした。

「なに、人生を楽しめないおぼこ娘、というだけのことです。男の味を知ったらはいそれまでよだ。可愛いもんじゃありませんか」と狐は大きくうなずき、薄い両手をさすった。

列柱のような黒い垂れ幕が、遠い炎に照らされ、柔らかく輝いている。

天井には、古い配線が入り組んで根瘤のようになっていた。

この亀裂は何なのだろう、と私は訝った。

同じ地下の濁った空気を吸いながら、まるで違ったことを考えている。

チサトは水からすくい上げた書物を持ち、ぼろぼろのページを開き、はっきりと澄んだ響き渡る声でその一節を、読みあげた。

「肉の思いは死であるが、霊の思いは、命と平安である。ローマ人への手紙――。私たちは、本来の魂の故郷に、戻らなければなりません。この世で何を追い求めても、腐敗と崩壊と喪失があるばかりです」

私は、言い知れぬ感情に襲われた。それは生な狂気に接したという感触とともに、私が現在おかれている立場を言い当てられているという不快感であった。

「どうです。あなた、気に入りましたかな」

縦縞のスーツを着込んだ狐が、狡猾そうな笑いを口元に浮かべて、私に話しかけた。

「血を流すチサト様は。上玉ですなあ。惚れ惚れします。菅生マネージャーも、いい娘を、見つけてきた。どうです、ああやって首筋に剃刀当てて悶えるところなんざ、なんとグツときますな。私は六本木のある店を紹介するといったが、断られた。残念ながら、この娘だけはオークションにかけないらしい。貴重な非売品ということですか」

同好の士を見出したつもりなのか、私に馴れ馴れしく話しかけ、名刺を差し出した。佐山貴金属とあった。私も不承不承、葛木画廊オーナーの名刺を手渡した。

どっちにせよ、これはさほど遠くない日に無意味になる紙切れであった。

私はチサトの前にしゃがみ込み、息を殺した静かな口調で、父親のように語りかけた。

「なぜあなたは、こんな、奇妙なことをやっているの」

チサトは、ゆっくりと大きな目を見開いて、私の目を直視した。

長くて美しい睫毛だ。

「奇妙ではありません。……私が傷つくことによって、それだけ、世の中の苦しみが、減るから。それゆえ、私は、もっと激しく、多くの血を全身から流さねばなりません」

しっかりした口調でいった。

そして、再び強く剃刀を握りしめた。

「それは、嘘だ」

少女はうつろにこちらに目を向け、淋しそうに微笑んだ。黒い瞳の焦点が、ずっと私に据えられた。

「あなた方は、ご自分の生業、お仕事以外の、一体何について、確信を持って語れますか。これまで、いろいろなものを追いかけてきたけど、何も無いはずですよ。追いかける、何もつかめない。追いかける、何もつかめない。追い求める、はぐらかされる。この世の人生は、そのむなしい繰り返し」

「そんなことはない。私だって、幸せを感じたことは、ある。確かに。昔の話だが」

「でも、それは続かない。幻に終わってしまう。それが、この世界の仕掛けです。この世と、あの世との仕組み。……いま、どうしてあなたの前に、このような風景が見えているのか、あなた

にはわからないでしょう。普通の人たちは、認識や知覚の仕組みすら、理解していません。もちろん、時間という幻の秘密も。この世界の人間たちには、かわいそうなことに、この生の目的がはっきりとは解き明かされていません。

……あなた方が、何処から来て何処へ行くのか。なにゆえにこの世界に生まれてきたのか、全く知らないように」

まるで風鈴でも鳴り響くような涼しげな声で、チサトはいった。

「そのようなことを説き明かすのは、実利を追い求める人々ではなく、私のような化け物に任されている仕事なのです。世の中が狂気でなければ、私が狂気。私が狂っていなければ、世の中が狂っている。その二つに、ひとつ。ここに妥協は、微塵もありえません」

少女は、うっすらと微笑んだ。

一体この娘は何者だろう。その声は沈鬱で奢った調子がなく、私を慈しむような調子が含まれていた。チサトは、私の目を直視したまま、自分の左肩から鎖骨の横に刃物を当てて、一筋、スツと切れ目を入れた。私の肉にも痛みが走るような気がした。

「いいかげんに、しなさい」私は、年長者の精一杯の威厳を込めて、語気を強めた。

「君は、騙されてるんだよ、夢を見ているんだよ。目を覚ましなさい。なにも、こんな最低の人間の中にいる必要はないじゃないか」

「最低の人間？ ほう。いってきますな、あなた」

佐山貴金属は、パイプを口から離した。

チサトは、ぐったりと疲れたように横を向いた。

水がやわらかくゆらめいた。

「いま、貴方の、苦しみと罪を、私の体に……移し変えておいたのです。この左肩の傷が、あなたを表します。いま流れている血は、あなたのために流されました。ああ、可哀想に。ずいぶん、暗く狭いところにいる」

私は挙動不審の男のように周囲を見回した。

精神を病んだ者の妄想とはいえ、自分の内面が人前でさらけ出されているような気になり、うろたえた。

血管の青く透けた乳房の谷間に、血液が赤いグミの実のように散っていた。

「これが私の、仕事なのです。私のような者の、生まれてきた意味。魂の仕組みについては、ここにいるすべての人々よりも、私の方がずっと詳しいでしょう。どのようにして人の魂が子宮に入り込み、そしてそこで胎児はどんなおぞましいものを見せられるのか、それは誰も教えてはくれない秘密」

少女は、うっすらと目を閉じた。

肩から、脇の下から、たらたらと赤い血を流しつづけている。

ルビー色の数珠のように連なった血は、白い体を網の目状に飾っていた。

私は彼女のいつていることを、なんとか否定したくてたまらなくなった。

そのことに凶暴なまでの衝動を感じた。

確かに、私の乏しい知識の範囲でも、聖書には世俗的な価値を否定しているようなところがあ

るのは知っている。

仏教などでも、この世が仮の宿だという発想はあるだろう。

しかし、この娘のいっていることは、あまりにも極端だった。それはまるで、通常の生の根こそぎの否定、いや、呪詛のように思われた。

そのくせ私は、この痛々しい傷だらけの肩に、乾いた柔らかいタオルでもかけて他の連中の棘だらけの視線から守ってやりたくてたまらなかった。

憐憫の情なのか反撥なのか、それともおせっかいの化けの皮を被った焦燥感なのか、自分でもよくわからない。

「ここは、だから、見世物小屋なんだろう。パトロンを探している人間の屑たちのバザール、なんだろう。こんなところで、わざわざ聖書を開かなくても。馬鹿げてるよ」

私は吐き捨てるようにいった。

貴金属商が、急にひゃひゃひゃッという奇怪な声を発して、快哉を叫んだ。

そして、前屈みの格好をしたまま、ぱしんと大きく手を打った。

「こりゃ、傑作だわ」

そして、頭の上でその手をひらひらと動かし、腰を屈め、

「気がふれた、二人とも気がふれた」といって、阿波踊りのような格好をした。

踊りながら、同意を求めるようにセイウチと白熊に目配せをした。

腹を突き出してふんぞり返っていた二人は、クククツと喉の奥から搾り出すように笑った。

貴金属商の男の小柄な姿は、炎に照らされて背を曲げた影絵となり、灰色の壁面で二重映しの姿でゆらゆらと黒鬼のように動いてた。

チサトの肌を薄い朱色の血が、水彩絵具のようにうっすらとなぞってゆく。

「あの人たちには、かまわないで。なにも、なんにも、見えてはいないのだから。……穢れの中に降りてゆくのが、神から与えられた私の役目なのです。この世の価値は、転倒しているのです。聖書や、お釈迦様が説いた通りに、すべてが逆さまになっているのです。この世で良いといわれるものが、悪い。悪いといわれるものが、良い。あの世では、それが逆転して精算される。誰もその恐ろしいことを、本当にはわかってはいない。考えようとも、していない。はっきりと私は、あなた方に告げます。地上の生命とは、過ちなのです。人間はこのまま破滅へと向かうあわれなレミング。世界が丸ごと狂っているのか、私が狂っているのか、二つにひとつです」

少女は大きく目を見開き、ゆるゆると不安定に立ち上がり、前屈みの格好のまま、濡れたトーガのような白い衣服を、X字にした両脚の膝の間に緩く挟んだ。

そして髪の毛から水を滴らせながら、蒼白な幽霊のように白く細い両手を差し出し、それから大きく十字を切った。

「もちろん、君の方が狂っている。間違いない。そもそもどうして、そんなこと確信を持っているのかね。君は人生の現実から、逃げているだけじゃないか。そうだろう。だって」

私は無性に腹が立った。

こんな小娘に、人生や世の中がわかってたまるかと思った。

それとも、私の知らない得体の知れない存在が、目の前にいるのか。

チサトはにっこりとうなずきながら微笑み、私の右手を取った。

そして、私の目を見つめながら、左程大きくもない乳房の間にはさんだ。

大切なものを温めるようにして、そのままじっとしていた。

私は驚いて手を引こうとしたが、チサトはまるで医師が患者の体でも扱うときのように、思いもかけない強い力で握っていた。

私はただ、意外な事なりゆきと、柔らかくもなめらかな肉の感触に、どぎまぎしているだけであった。

「あなたはいま、とても、不安なのですね。伝わってきます」

そして全身から網の目のように血を流している半裸の少女は、首を伸ばすと、私の手の甲に、そっと唇を押しつけた。

思いもよらない仕草に、私はさらに動転した。

暗紫色の長い垂れ幕が、靄のような香の煙の中、あちこちでゆっくりとめくれあがった。次第に私の中で立ち騒いでいた暗いものが、煙のように指先から抜け落ちてしていくように思われた。

「焦燥感と魂の爛れの感触が、ほら、私の中に流れ込んでいきます。この不安の味わいを、記憶してください。その暗さと、たゆたい、その味覚を、いまの気持ちで見つめてください。これは、あなた自身ではなく、異物です。あなたの意識とこの感情を、区別するのです。大丈夫です。私はいま、吸収しました」

チサトは、まるで盲人が視界に入らない相手に熱心に語りかける時のように、宙を見たまま恍惚としてうわごとのようにそう呟き、私の右腕を両手で強くつかんだ。

ごわごわした私の指の間に、自分のしなやかな指を差し入れ、さらに澄んだ目を大きく見開いたまま、語り続けた。

「そのもやもやの向こうの風景まで、強い強い意志をもって覗き込めば、不安の根が、正体が、見えてきます。不安を掻き立てている、あなた自身の後姿が見えてくるはずですよ。それは、甘やかされた、苦勞知らずの、小さな男の子。縁側で一人ぼっちで絵を描いていた少年」

私は、鞭で打たれたような気がした。

「その、つまりだ。カウンセリングは、間に合っているんだけどね」

なんとか動揺を誤魔化すためにそれだけ言うと、自分の娘のような少女を押しつけ、私はハンケチで額の汗をしきりに拭いた。

周辺の間人が皆、私を見ているような気がした。

確かに私は、子供の頃一人で飽きもせずによく絵を描いていた。

父も母も外に出ている日、明るい陽光の差し込む縁側に寝そべり、何枚も何枚も、画用紙にクレパスで絵を描いていた。

その小さな背中が、一瞬、見えるような気がした。

本当は他人の絵を売るよりも、自分の絵を描きたかったのだ。

自分の世界を創りたかったのだ。

ひょっとしたら、それが唯一の私の心の置き所だったのかも知れない。

いつしかその欲求を封じ込め、生活のために親父の作った画廊を継いで、大して惚れ込んでもいない他人の絵を右から左へと商うようになった。

私はこれまで、自分を抑圧して、人並みの世間的体裁を取り繕ってきた男だ。

しかしそんなことは、世間にざらにあることだ。

あるいは私は彼女の心理的詐術にひっかかったのだろうか。私も心が弱ってきたのか、いつのまにやら手を握っている少女の微笑みが、天使のそれのように思えてきた。

「不安の雨雲の全体は、自分自身で作りに上げていたことが、はっきりと理解されます。あなたは、自分が吐き出した糸に閉じこもっている虫のようなものです。ああ、流れ込んでくる。毒素が流れ込んでくる。ほら、もうだいじょうぶです」

少女は私からぱっと手を離すと、にっこりと微笑んだ。

「でも、ごめんなさい。チサトは、今日はもう、疲れてしまいました」

しばらくうつむいて呼吸を整えると、少女は片手を後ろでさ迷わせ、盥の中に腰を下ろした。そして水の中で白い太ももとを交錯させ、あぐらをかき直した。

盥の中で水がぐるりと流れ込み、濡れ浸ったトーガを取り巻いた。

「あなたの恐怖と不安の塊が、私の中で鬱血となって溢れてきたので、この肉体から、取り出さねばなりません。あなたの、心の闇を、私の血をもって、贖います」

チサトは、また自分の中に入り込んでしまったのか、座ったまま手を組んだまま上を向き、何かに祈るように無意識に半身を揺らした。

しばらくすると、左足の膝を突き出して、薄物を太ももの付け根まで捲り上げると、剃刀を大腿に当てて、鋭く切った。

桃色の細い傷口が、刺身のように薄く開き、たらたらと血が流れた。

こちらまでひりひりしてくるような光景だった。

「あなたは、キリスト様か何かのつもりかも知れないが……こんなおままごと、私は、受け入れられない」

声を震わせながら、私はいった。

チサトは淋しそうに笑った。

「どう考えようと、あなたの自由です。これは、私からあなたへ贈られたバプテスマ。洗礼です」

「洗礼。洗礼と来たかね。なるほど、これではっきりした。君はただの誇大妄想狂だ。傷ついた青春には、しばしば起こる平凡な症例に過ぎない」

私は相手から目をそらし、かすれた声で、そう断定した。

少女はその言葉に、子供っぽく声をたてて笑った。

それからひどく疲れたように体を斜めにし、片手で水をすくい取り、丸くて白い肩の血の傷跡を拭った。

——と、突然、チサトの体がぐらり前に傾き、盥の中に頭ごと崩れ落ちた。

あわてて奥から二人の男が飛び出してきた。

まるで待機していたかのようなようであった。

菅生も、素早く手で合図をし、二三の指示をした。例の黄色いタキシード姿の老コメディアンも、飛んできた。

奥の暗い通路からガタガタと車椅子が引き出された。

盥の中で前に両腕を伸ばし、万歳をする格好でうつ伏せになっているチサトの脇につけられた

。四肢を張り出し、指を反らし、ぞっとするような、ひどい痙攣が始まった。

まるで、悪魔憑きの光景のようだ。

男たちは、目を閉じているチサトの濡れた体を、背後から抱きかかえて持ちあげた。まるで捕獲された小鹿のように、力ない手足が不器用に突き出した。

ぴんと開いたままの白い指先や、お化けのように垂れ下がった褐色の髪から、際限もなく水が滴り続けていた。

盥に溜められた水は、右に揺れ、左に揺れ、あちこちに金色の多重の円を反射させつつ、やがてゆっくりと静止した。

水面には血液が混じって、綾取りの赤い糸のような模様を描いていた。

水の中に沈んでいた聖書の上には、幾片かの赤い血の花が、鮮やかな薔薇が咲くように薄く開いていた。

「あんた今、おままごとして、いったわね」

と、老コメディアンが、据わった目をして、押し殺すような口調でいった。

「このチサトって子は、十六のときから自分のホームページで呼びかけて、他人の罪や穢れを自分の身に引き受けて、カッターで自傷行為を続けてきた子なのよ。傷だらけのチサトの映像が、インターネットで興味本位に、流されたわ。いろんな人の自殺衝動を、わが身に吸収したの。何度も死線をさまよい、精神病院にも入れられたのよ」

黄色いタキシードを着た初老のオカマは、溜め息混じり声でいった。しみじみとした表情に、さっきの毒気はすでになかった。

「馬鹿な子、ほんとうに馬鹿な子。自分が苦しんでも、痛みを感じても、誰一人感謝してくれやしないのに」

空調の暗い排気口が、低く音をたてていた。

何本も天井から垂れ下がっている青黒い垂れ幕が、腰をゆすってゆっくりと踊る背の高い黒人の踊り子たちのように見えた。

どうやら少女は、ここの人間たちには大切にされているらしい。もしこの悪意と侮蔑の支配するこの場所に、救いというものがあるとするなら、それだけかも知れない。

「もうこの子、自分で歩けないの。まだ、十九歳なのに」

なるほど、どことなく彼女の動きがぎこちなかったのは、そのせいかも知れない。

目尻に厳しい皺の寄ったコメディアンは、車椅子の前に屈みこみ、寝ている幼児のような顔になったチサトの髪を、耳の後ろまでに搔きあげてやった。

その繊細な仕草は、むしろ優しい老女のそれであった。

綺麗に揃えられたつま先は、すでに血の気を失って、丁寧に作り込まれた蠟人形のように蒼白になっていた。

やがて左右に水を滴らせた車椅子は、大きく向きをかえた。

チサトは、障害者のように首をがっくりと横にたらしただまま、奥の方へと押されていった。水滴が黒い模様を描き、事故で曲がった線路のように、不安定な道を作っていた。

少女を乗せた車椅子は、暗い出口へと消えていった。

呆然としている私の目に、コンクリートの天井から下げられた幾本もの垂れ幕が、鈍い暗紫色の生地をひるがえしていた。

霞のような煙の混じった空気が、渦を描き、曲線を描き、左の方へと流れていく。

やがては奥の暗がりにある排気口へと吸い込まれていくのだ。

「本当はね、私、これをあなたに見せたかったのです」

菅生が、隣で囁いた。私は、菅生の横顔を見た。

「少なくとも私は、彼女の愛らしい戯言を壊したくはない。人知れぬ灯のように守りたい。私なりの罪滅ぼしとしてね。……わからないのですよ。人生の半ばを過ぎても、生きていることの意味が。それでも、毎日が繰り返される。売ったり買ったり消費したり、愛したり嫌悪したり同意したり憎悪したり、人を騙したり騙されたり、そんなことが延々と反復される。何か重要なことをやっているのだろうか、価値あるものを生み出しているのだろうか、いまだに青臭く考えることもある。利益？ 何のために。経済？ 誰のために。このもっともらしい全体が、一体どこへ行くのか。すべてが謎のまま、時だけが過ぎていく。この世の縦軸がわからないまま。そして、いつしか癌か脳卒中になって、くたばる。パタリとね。そう、あれですよ。……生まれ生まれ、生まれ生まれて、生の始めに冥く……という」

菅生は唾えタバコのまま、背後の陶製の像を見やった。

「死に死に死に死んで、死の終わりに暗し、ですか」

顔の前を、濃い煙が流れていく。

私と菅生は、互いに顔を見合わせて、初めて笑った。

あらためてあの奇妙な神像を眺めた。

先ほどは気づかなかったが、蒼古とした威厳を帯びている。

「あの像は、中国四川省の道教寺院のもの。由緒ある秘仏です。気味の悪い顔をしているが、よく見ると目尻が温和に微笑んでいる。あれは、能の翁の目だ。太極老人といわれる神の変化した土俗神ですが、正確にいうと仏教やヒンズー教も混ざっている。いわば聖天と老子が合体して融けあったような土俗的なものです。しかしそこに、何らかの真実がある、そう私は、思っています」

「奇妙な信仰ですな。聞いたこともない」

「文革で地方の寺が破壊されたときに、村の穀物倉の地下に運び込まれ、長いこと隠されていたのです。古い荒縄で、包帯のようにぐるぐる巻きにされて。埃まみれになって、闇の中で笑っていた。太ったミイラのように。美も醜も、価値も無価値も超えた、まっさらな世界を体現するという神です。土地の古老に聞くと、この神自体が、人の意識を鏡のように映す多面体だということです。実際、写真を撮る度に表情が違う」

この集会の雰囲気も、時間とともに弛緩してきたのか、すでに幾つかのグループに固まりつつあった。

赤黒く塗られた粗い壁面に、大きな影や小さな影が交わりながら、静かに踊るように左右に動いていた。

「葛木さん、あなたがこの倶楽部の萬の門から何を見ようと、何を引き出そうと自由です。現象そのものは、中立的なものだ。すべては鏡なのだから。私は人非人だが、人間というものをこう

して観察しているんです。すべてを剥ぎ取られた人間の心の在り様というものを」

「傲慢だな。世間は別に、あんたのモルモットじゃない」

チサトの手元から放れて、水の中にしばらく沈んでいた聖書は、やがて水を吸って分厚くふくらみ、白い水中花のように花開いていた。

「とはいえ、私は少しあなたを誤解していたのかも知れない」

それは私の本音だった。

「あなたの見たままの人間です。つまらない男だ」

交響曲がゆるやかなアダージョに入っていた。

「まあ、しかし、悪を欲して結果的に善をなしてしまう例の種族の末席ぐらいには、あるいは入るかも知れない」菅生はそこで、暗くニヤリと笑った。

「メフィストフェレス気取りですか。まいりましたな」

「私がメフィストでなくても、誰もがこの世界の探求者であり、ちゃちなファウストとして生きているのですよ」

私は顔をそむけた。今さら説教は聞きたくない。

この旋律は、第四楽章だったろうか。

煙がゆっくりと左に流れていく。

排気口に向かう空気の流れが、半透明の渦巻き模様を描いていた。

「あの、何といいましたかな、痩せた女の子。彼女には、体を大切にと伝えてください。いや、意味のないことをいったかな」

私は、車椅子に突っ込まれて、糸の切れた操り人形のようになったチサトの無残な姿を思い浮かべた。

「どうですか。葡萄占いは」

柱の影で先程の占い師の女が、黒いボールをつまみ上げ、にッと笑った。

その桃色の口腔には、歯がなかった。もっと若いと思ったが意外だった。女は葡萄の実を幾つか掌にのせて、私の方へと差し出した。

葡萄の皮を口から吐き出し、「よく当たるわよダリルの占いは」といって険しい皺を寄せて笑った。

数本の長い髪の毛が、薄く開いた唇にはさまれていた。女の舌の上のにせられた飴色の葡萄の粒は、中心に神経線維のような白い筋が見えた。女はにやにやしながら、ゆっくりと舌を丸めて口の奥へと葡萄を飲み込んだ。

私は軽く会釈をし、その場を去ろうとした。

と、その時、薄闇の底に沈んでいた敗残者たちが、むっくりと身を起こし、思い思いの格好でこちらを見た。床を這いずり廻っていた犬男や豚男、ヤモリ男など、異形の者たちが、私に静かに微笑みかけていた。

先程は嫌悪感しか与えなかった彼らは、同じ姿をしていながら、すでに陰惨で薄汚れた存在で

はなく、炎の光の輪を背に受け、輪郭を青白く縁取られ、何かしら崇高な者たちの仮の姿のように思われた。

これは、目の錯覚だろうか。白昼夢だろうか。

混乱した印象のために何ともいえない気持ちになり、この倶楽部の象徴らしい陶製の巨大な聖萬門の像を、改めて眺めた。

蠟燭の炎が揺らめくたびに、顔面の凹凸や腕に持たれた錫杖の影が、不安定な塊になって壁に広がる。混沌の汚泥の中で静かに笑っている聖なる魔神は、太古の石像のような威厳を帯びていた。

祭壇に安置されたその物体は、すでに禍々しい化物ではなく、香の煙の中で異国の仏像のように謎めいて微笑んでいた。

私は菅生に別れを告げた。『聖萬門教会』の黄色い鉄扉を閉め、一呼吸した。

暗い廊下を過ぎ、階段を昇った。あのギリシャの小神殿まがいの建物の外に出ると、崩れかけた壁のいちめん夕日が激しく照りつけ、蔦の這い廻る廃材の上を蜜柑色に染めていた。

まるで光の差し込まない海底の洞窟から出てきたような、ほっとした気持ちを味わった。

ガラスの割れた窓からマネキン人形の群像たちが、生白い手足を夕陽に差し延べ、痴呆のような青い目でこちらを見ている。

下腹を桃色に染めた雲が、西の空を覆っていた。

空気はまだ、蒸し蒸ししていた。近頃は地球が狂ってきたのか、最近夕立というものが見られない。

昔だったら、この時間ひと雨くる頃なのだが。

ビルの窓という窓が、夥しい金色の板のように反射していた。

通りに出ると、青い影絵のようになったビルには、ネオンがそろそろ灯りはじめていた。

金曜日の夕暮れ。人待ち顔の若い女たちが、十字路の前で腕を組んでいた。

全身の脱力感と、どう処理していいかわからない感情の群がり。

私は胸を抑えて唾を吐き、しばらく歩いた。

そしてあのチサトという不思議な娘のことを考えた。

遠い信号が明るい青緑に輝き、灰色の影絵のようなビルの輪郭が霞んでいた。

あの菅生という男も何かを探しているようだった。

その輝きのために、幸福も不幸も、すべての視界が明瞭になるような、何かを。

しかしすぐに私は、他人のことなど考えていられる余裕などないことに思い至った。

これから年内のうちに、ギャラリーの後始末や、自身の身の振り方も含めて、重苦しいことを考えていかねばならなかった。

明るく照らされた店のショウウィンドウの中では、早くも褐色の襟を立てて秋の服が並んでいた。

その前をブリーフケースを抱えた若いビジネスマンや、流行の服を着た女たちが、ハンケチで額を拭いながら、足速に歩いていった。

先程のビルの真裏にあたる車庫から、黒塗りのベンツがゆっくりと出てきた。

夕日が堅固に作られた艶のある車体に、夕日が耀いていた。

私のすぐ脇で、車が滑るように止まった。

そして窓が、スルスルと開いた。

「あんた、葛木画廊の葛木さんでしょ」と後部座席の人物はいった。

どこかで聞いたような声に、私は驚いて顔をあげた。

その太った老人は、分厚い唇から葉巻を離し、

「知ってますよ。ずいぶん、お辛いでしょ。さっき会社に携帯をかけて、お宅の内情を調べさせました。あの額では、もう立ち直れんでしょうがねえ。……ところであんたは、いつおやりになるんですかな？」と喋り、疣だらけの大きな顔に薄笑いを浮かべ、窓をスッと閉めた。

黒塗りのベンツが目の前を静かに過ぎ、広い通りの方へと曲がっていった。

一瞬、私にはその言葉の意味がわからなかった。

後部座席の人物は、どうやら先程の地下の集会で出会ったセイウチに似た老人らしい。

車が小さな黒い点になってから、老人の意味したことがわかり、私はその場に立ちつくした。

——あんたは、いつおやりになるんですかな？——

太い声が、耳に焼きつく。

人の死まで、見世物なのか。

私は、激しい動悸がして、街燈に手をかけ前屈みになった。

苦い胃液が溢れ、痙攣のような嘔吐感がせり上げてきた。

ビルの間のアスファルトに烈しく夕陽が照りつけていた。

私は胸を押さえて喘ぎながら、血をまき散らしたような夕焼け空の下のビルの谷間に、白い水中花のような透明な幻が、ゆっくりと開いてゆくのを茫然と眺めていた。

(了)

水びたしの聖書

<http://p.booklog.jp/book/22092>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22092>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22092>